

St. Luke's International University Repository

Learning and Tasks in Gerontological Nursing Practice at Health Service Facilities for Elderly.

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2007-12-26 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 久代, 和加子, 南川, 雅子, 亀井, 智子 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10285/398

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



老人保健施設で行う老年看護実習における学びと課題

久代和加子¹⁾ 南川 雅子¹⁾ 亀井 智子²⁾

要 旨

老人保健施設で学ぶ総合実習（老年看護）も2年目となった。介護保険制度の導入や、実習先の職員交代が相次いだことより、事前の打ち合わせを十分に行った。また昨年の実習で課題となっていた実習前の学習状態、実習環境づくり、実習指導体制についてはよく見直し、昨年度の後半とほぼ同様の方法で実習をすることにした。また今回は、これまでの学びと今回の実習の学びを統合させるために、個々の学生にケースレポートを課した。

前半に実習をした4名の学生による「日々の実習記録」と「総合評価」にある内容、およびケースレポートの内容をデータとして収集し質的に分析した。学生の学びの記述をカテゴリー化して分析した結果、「施設の役割と意義」「専門職の役割と連携」「実際の支援活動」「家族の意義」「退所後の生活と社会のサポート」「実習の振り返り」の6つにカテゴリー化され、各々サブカテゴリーも抽出された。これらのことから、個々の学生が受け持った利用者は1人であっても、4人の学生が情報を共有化することにより実習目標は達成されていると考えられる。

学生による実習後振り返りや施設職員へのアンケートから、「現場だからこそ学べることへの指導強化」と「スタッフと学生の学びの共有化」が今後の課題としてあげられた。来年度に向けて十分検討して、学生がより深く老年看護を学べるようにしたい。

キーワード

総合実習, 老年看護, 老人保健施設, 学びの共有化

I. はじめに

聖路加看護大学で老年看護学が独立して教育されるようになり2年目を迎えた。この間、さまざまな視点からの老年看護基礎教育のカリキュラムの見直しや、実習方法の改善を行ってきた。また、医療機関ではなく老人保健施設という生活の場をフィールドに実施された前年度の総合実習（老年看護）の反省から、よりよい実習環境づくりのプロセスについて既に報告している¹⁾。

総合実習では、看護援助論IVや臨地実習の積み上げの後、最終学年（4年次）で行われる実習であるため、学習者の関心の強い看護領域で学ぶことができ、対象者の最適健康状態を生み出すことができるようメンバーの一員として主体的に働きかける能力を養うこと、およびそ

れらの実践を通して、看護の専門性について考え、自らの看護に対する看護観を深めることを目標としている。

今年度の総合実習は、介護保険制度がスタートした直後でもあり、高齢者をめぐる諸問題は依然として山積みのままであるフィールドで実施された²⁾。3年次老年看護の臨地実習では、老人病院で高齢者の身体的・心理的状态および社会的背景を学んだ学生が、今回は福祉施設であり中間施設である老人保健施設で学ぶ機会をもつことは、さまざまな場で生活する高齢者への看護支援についてその専門性の理解をより深めることができたと思われる。さらに現実の高齢者介護や抑制をめぐる問題³⁾をより身近に体験できたということでも有意義であったと思われる。今回は、実習前の学習準備状態、実習環境づくり、および実習指導体制の実際について述べるとともに、学生の学びを質的に分析し、今後の課題について述べる。

1) 聖路加看護大学 講師（老年看護学）

2) 聖路加看護大学 助教授（老年看護学）

II. 総合実習開始前の学習状態

1. 実習の積み上げ⁴⁾

本大学における実習レベルが3段階に分かれていることは、前回の報告で述べた。第1段階は看護援助論Ⅳであり、全看護実習領域の基礎につながるものである。第2段階では、臨地実習として全領域を2単位ずつ、老年看護、家族発達看護、小児看護、精神看護、慢性期看護、急性期看護を学んできた。

第1段階の実習目標は、入院中のさまざまな年齢の対象者との関係性の確立、現在の状態のアセスメント、必要な生活援助の明確化、必要なケアの実施などを通して、看護専門職者としての態度を養うことである。

第2段階の実習目標は、発達段階の各期の看護を、家族発達看護・小児看護・急性期看護・慢性期看護・老年看護・精神看護の視点から実習してきた。老年看護実習は老人病院で行われており、高齢者の療養生活や治療の援助をする際には、高齢者のこれまでの人生の軌跡や価値観、生活のありようを捉えた看護活動が必要であることを学んできた。実習病院であるH病院では7割以上の入院患者が痴呆を伴っていること、患者の平均年齢が80歳前後であること、入院期間が2-3年以上に及んでいること、医療保険、老人保険が適用されていること、で患者の背景にかかわる社会制度にも触れることができた。また一部の学生は100歳を超える入院患者との出会いをもち、その人の人生のありようや加齢現象をより深く認識できたと思われる。しかしながら、治療と療養の場である病院だけの実習では、これだけ多様化している高齢者のさまざまな生活の場を理解するには限界がある。そのため、たとえ選択者のみではあっても、第3段階の総合実習が老人保健施設で行えたことは、看護職の働く場、他職種との協働の場、さまざまな健康レベルの高齢者を理解するという観点で、たいへん有意義であったと思われる。

2. 教科目について

総合実習の時期が4年前期であるため、3年後期までに、疾病治療概論、疾病治療各論、急性期看護論Ⅰ、リハビリテーション看護論ⅠⅡ、慢性期看護論ⅠⅡⅢ、生涯発達看護論ⅠⅡⅢ、ターミナルケア論など主要な基礎・専門科目の履修は終了している。必修科目で総合実習後に学ぶ科目は、地域看護論Ⅱ、地域看護実習(カリキュラムの都合上、総合実習前半の4名の学生は総合実習終了後に地域看護実習を受ける)、看護研究Ⅰ(同じ頃)、看護政策論、総合看護・看護研究Ⅱ(選択必修)である。

3. 実習前の学習状態、関心事

実習前に行ったアンケートでは、次のような抱負が述べられていた。

- 生涯発達看護論Ⅲで学んだことを生かして老年看護の理解を深めたい。また高齢者が在宅で過ごし続けるにはどうしたらよいか、実習を通して知りたい。
- 介護老人保健施設に入所中の高齢者の健康問題、またそこで働く職種とその役割を明らかにしたい。
- 入所中の高齢者のこれまでの人生、価値観を踏まえた上で援助を行いたい。
- 痴呆の進行に合わせて、高齢者への意識や対応が揺らぎ始めている今、高齢者の身体的、精神的变化を理解し直したい。また心から高齢者を受け入れられるようにできたらと思う。
- 前回の老年看護の実習では、患者の力を引き出すというより、やみくもに手助けしてしまったように思うので、今回はセルフケア能力を見極めて看護すること、また個性のあるケアプランが立てられるようになりたい。

III. 実習環境づくり

前年度の反省を含めて、実習機関のケアの責任者である療養部長(介護職)に、実習要項に沿って今年度の実習のねらいを説明した。また、ケアワーカー、介護福祉士、ヘルパー、看護婦に対して、実習中に担ってほしいことについてまとめて全員に配布し、理解と協力を求めた。なお、今年度は施設長、看護主任、療養部長(ケアリーダーから昇格)、リハビリ主任、その他のスタッフの異動があったものの、療養部長が中心になり説明と調整の結果、昨年度の後半と同様に実習できる環境が整えられた。

IV. 指導体制について

実習要項の作成、実習機関との打ち合わせは老年看護の教員3名で行い(助教授・講師)、実習中の直接的指導は、講師が1グループずつ担当した。実習方法は昨年度の後半グループと同様に初日から3日目までは、施設の概略や看護婦と介護職の役割、受け持ち利用者の生活スタイルの観察など、施設側のオリエンテーションや、看護職や介護職に個人的に1日ずつ付いてともに援助活動する実習を組み込んだ。

実習終了後に、現場との反省会をもち、現場の指導者からのコメントをうかがった。

1. 実習開始前

教員によるオリエンテーション：実習要項および介護保険制度の説明

2. 実習初日

1) オリエンテーション

療養部長によるオリエンテーション：スタッフへの紹介、施設概要および特徴、入所から退所までの過程、チームメンバーの職種、通所リハビリなどの説明、その他、各階のオリエンテーション、受け持ち利用者の紹介。

2) 情報収集

利用者ファイルなどより、利用者の入所までの経過や背景、およびADLレベルなどについて情報を集め、その日のうちに個別の受け持ち利用者1名を決める。

3) 2日目・3日目の実習

実習をする各階で、ケアワーカーと看護婦の役割・仕事を理解するために1人のケアワーカーまたは看護婦について行動を学ぶ。

4) その他の日の実習

- 受け持ち利用者への看護援助を実践する。
- 通所リハビリテーションを、実習期間中に1日見学実習する。
- 施設利用者に関する初回・中間カンファレンスに参加する。
- 学生カンファレンス・実習のまとめ。

V. 学生の学び

前述のような学習環境と指導体制の中で、前半と後半の2グループ計8名が10日間ずつ実習した。ここでは、前半に実習をした4名の学生の「日々の実習記録」「総合評価」の内容およびケースレポートの内容をデータとして収集し質的に分析した。対象となった学生には、実習に用いた記録物について分析を行い発表する旨、連絡済みである。学生の学びの記述をカテゴリー化して分析した結果、「施設の役割と意義」「専門職の役割と連携」「実際の支援活動」「家族の意義」「退所後の生活と社会的サポート」「実習の振り返り」の6つにカテゴリー化され、各々サブカテゴリーが抽出された。

1. 施設の役割と意義

サブカテゴリーとして、利用目的・施設における生活・痴呆の人の生活・通所リハビリがあげられている。それぞれの内容は以下に示すとおりである。

1) 利用目的

リハビリ・家族の休養・在宅の限界などさまざまなものが含まれていることを理解している。また点滴をして

いること、暴力行為があるなど老健施設では対応しきれないと思われる対象についてのチームメンバー間で行われたディスカッションは、老健施設の位置づけを考えるきっかけになっていた。

2) 施設における生活

入浴・食事・リハビリテーション・クラブ活動・レクリエーションなど多彩ではあるが、どれかを楽しいとするよりは、「大勢の中で一緒にいること」が重要であるようだ。学生は気づいている。施設内の活動が利用者の生活を活性化していること、および施設が安住の場として安心できる場であり利用者からの不満がないなど満足度が高いこと、またリハビリがづらいこと、入浴がとても安らぎを与えるものであることなどの気づきがあった。

一方、感染予防のための個室隔離が、本人には特に説明もなく行われていたことに対し、本人には隔離の理由を知る権利があり、医療者はそれを知らせる義務があるのではないかという考察をした学生もいた。この学生は受け持ち利用者の隔離体験を通して不安や拘束について深く学んでいた。

3) 痴呆がある人の生活

一瞬一瞬を懸命に生きて、その積み重ねで一日一日を過ごしていること、夕方症候群の心理状態は不安でいっぱいであること、発することはよやくす行動の意味を考えていくことは支援する上で必要不可欠であることを再確認できていた。

4) 通所リハビリ

利用者同士に交流があること、慣れるまでの心理的負担が大きいこと、スタッフはその日のことはその日のうちに解決するようにして利用者が気持ちよく帰宅できるように配慮していること、介護保険との関連で利用頻度に限界があることに対して制度として改善の余地があること等、学びを深めている。

2. 専門職の役割と連携

1) 看護職の役割

「やる看護、すなわち何でも手助けする看護」より「引き出す看護、すなわち、その人のもっている力を最大限発揮させるための看護」をしていること、健康管理の視点で心身の状態をアセスメントしていること、入浴できるかどうかの判断をする、医療処置や薬の管理、痛みへの対応、十分な知識や技術、判断力が求められていることなどが役割として捉えられていた。

2) 介護職の役割

介護職のもつ視点を体験的に学べたことは、連携をとって働くことへのよいステップであること、日常生活への支援や活性化が主な役割として捉えられていた。

3) チームケア

チームメンバーが個々の生活を視点にして協働していることは、ケアカンファレンスからわかった。ケアワーカーと看護婦等が協働しながらその人のQOL向上を目指していることを実感できたなど体験を通して学びを深めていた。しかしながら、感染管理において、スタッフ間で共通の知識がなく、援助方法が統一されていないことは、利用者から不信感や不安感が増大することも考えられ改善すべきであると考えた学生もいた。

3. 実際の支援活動

1) コミュニケーション

コミュニケーションは、高齢者を支援していく上で最も基本的で大切なことである。1つの行動前に必ずことばかけをすること、ゆっくりはっきり話すこと、頻回な声かけをして孤独感をもたないよう配慮するなど実践活動を通じた学びが得られていた。

2) スタッフの態度・技術

尊敬の念をもった対応、自然体で利用者と接していること、高齢者に接することを楽しんでいること、利用者の個々のADLを考えてケアしていることなど体験を通じた学びが多くあった。

3) 看護技術

歩行機能の維持、休息と活動のバランス調整、食事介助、排泄介助、リアリティ・オリエンテーションの技術、ケア対象者のセルフケア能力のアセスメント、無理強いないことなどについて実践活動を通しての学びが得られていた。

4. 家族の意義

家族の存在の大きさ、家族から得る情報の重要性、家族が何にも代えがたい重要な存在であること、実際に介護している人とキーパーソンが違う場合の重大なトラブル、家族調整は難しいこと、本人のみならずその家族までを視野に入れ家族全体が幸せになるような援助が大切だということが実践活動を通して学んでいた。

5. 退所後の生活と社会的サポート

早めに退所後の生活に注目しながらケア方針を立てていくことの大切さ、施設内はバリアフリーであるが、施設外は車椅子生活が難しく生活範囲が狭まってしまうこと、介護者にとって、自分の生活と介護とのバランスが難しくなる場合、家族である介護者の負担を少なくして地域社会で支え合っていくことがいかに大切であるかが学んでいた。

6. 実習の振り返り

「高齢者や痴呆の方に接することは楽しかった」「受

け持ちの方との出会いはすばらしく感じられた」「痴呆の方への対応は難しかったけど学んだことも多かった」など満足感や達成感のある感想と、「改善が必要と思われたことについて積極的に進言できなかったことが悔やまれる」「フロア業務に流されて自分の実習目的を忘れそうになった」「現場のスタッフと業務内容だけでなくいろいろのことについて話し合いたかった」など指導の改善に向けた意見があげられていた。

VI. ケースレポートにみる学び

今年度は学生にケースレポートを課した。ケースレポートは、藤原ら⁵⁾の述べているように、実習中に心に残ったことや、疑問に思ったことの一つを掘り下げ、文献的考察を加えて現場から得た学習を理論的にもおさえるようにした。

受け持ち利用者のプロフィールと各学生が選んだテーマおよびその内容を表1に示した。「住みやすい街づくりをするためにナースができること」「痴呆高齢者に対する積極的アプローチとしてのリアリティ・オリエンテーションー視覚的アプローチの重要性を考える」「レクリエーションの効果」「介護老人保健施設における感染管理の現状と課題」など、各学生が実習中に感じた疑問や課題に焦点があてられていた。

Aさんを受け持った学生は、リハビリをがんばってきた利用者本人の強い帰宅願望があるにもかかわらず、自立歩行できない人の自宅がエレベーターのない5階にあることや、介護者の健康状態がよくないため、退所を延長せざるを得ない状況を知ること、社会体制の不十分な現実に直面した。

またBさんを受け持った学生は、痴呆のある利用者によりリアリティ・オリエンテーションを実施して聴覚や視覚を刺激する方法が有効であるという体験をもった。そして多くの痴呆のある利用者が生活するため、管理上閉鎖されているフロアだからこそ、より生活感のある味覚や臭覚の刺激が有効かもしれないという示唆を得ている。

Cさんを受け持った学生は、老人保健施設で行われているレクリエーションが、ただ単に実施されているのではなく、一人一人の利用者の残存機能を配慮しそれを最大限発揮できるように、さりげなく声かけして、意欲を引き出し、生活の活性化と訓練に結びつけている実施者の経験と技を理論づけて理解を深めた。

Dさんは、歩行する力やADL機能の低下している人であり、日々リハビリ訓練が行われていたが、MRSAの感染がわかってからは、個室に隔離され、他の利用者等との接触が全くなってしまう。過剰ともいえる予防対策が人的・経済的に支障をきたしており、人権問

表1 受け持ち利用者の背景とケースレポートのテーマ

受け持ちの利用者の背景	ケースレポートのテーマと内容
<p>Aさん 年 齢：65歳，男性 入所理由：自立杖歩行を目指したリハビリ 状 態：脳梗塞後遺症（左半身麻痺） 要介護3，寝たきり度B1，生活自立度I 妻は心筋梗塞で緊急入院中</p>	<p>【住みやすい街づくりをするためにナースができることーヘルスプロモーションの考えから】 内容：①本人および家族の願いや思いの確認，②多角的側面からの理解により個別ケアを考える，③リハビリテーションへの取り組み（生活の場の視点），④社会資源の活用，⑤高齢者・障害者について，地域に根ざした啓発活動，⑥継続ケア（アクセスが容易）</p>
<p>Bさん 年 齢：86歳，女性 入所理由：①家族による介護困難 ②特別養護老人ホーム待ち 状 態：痴呆，狭心症，不整脈，高血圧，不眠 独居生活ができなくなり，姉妹で入所していたが，最近，姉が急性期病院へ転院した。車椅子生活。介護していた甥夫婦は介護疲れが強い</p>	<p>【痴呆高齢者に対する積極的アプローチとしてのリアリティ・オリエンテーションー視覚的アプローチの重要性を考える】 内容：痴呆がある人の生活の場は，管理上閉鎖状態に置かれている。そのような環境では聴覚や視覚を活用したROを含むレクリエーションは有効であった。今後は味覚や嗅覚を生かした介入を考えていく</p>
<p>Cさん 年 齢：86歳，男性 入所理由：介護者の休養と外出 状 態：多発性脳梗塞，心房細動 要介護2，寝たきり度B2，生活自立度Ⅱb 会話はその場限り（意志の疎通はできる）</p>	<p>【レクリエーションの効果】 内容：①実施時間の選定，参加者の招集，席順や並び順の決定，参加を無理強いしない，②小刻みに声かけする，ごく自然に行うなど実施中の配慮，③効果は生活の活性化とADL機能の維持</p>
<p>Dさん 年 齢：78歳，女性 入所理由：廃用症候群のリハビリ 胃潰瘍，高血圧，変形性腰椎症，糖尿病，うつ病，MRSA（個室隔離）</p>	<p>【老人保健施設における感染管理の現状と課題】 内容：歩行能力とADLの低下した人にリハビリが行われていたが，他院への転出前の検査で，MRSAの咽頭感染がわかった。直ちに，個室に隔離されガウンテクニックによる対応が始まり，他の人との接触がなくなった。過剰な対応は，人権問題にもなりかねない。根拠に基づいた感染予防マニュアルの作成が望まれる</p>

題にもなりかねないため，早期の感染管理マニュアルづくりが望まれると考察した。この学生は，現場の感染対策の立ち遅れが，いかに高齢者の生活のQOLにマイナスの影響を与えたかに直面していた。

ケースレポートは，実習終了後，全員の分を綴じて「ケースレポート集」を作成し，学生および現場指導者に配布して内容の共有化を図った。

VII. 施設で働くスタッフの意見

実習後のアンケートでは，実習目標，教員や学生とのコミュニケーション，実習への準備体制などについて概ね良好な評価を得られた。しかし，看護職からは，「現

場だからこそ学べることへの指導の強化」「スタッフと学生の学びの共有化」について検討してほしいという意見があった。

VIII. まとめと今後の課題

老人保健施設で実習するにあたり，実習前の学習状態，実習環境づくり，実習指導体制は，慎重に見直した。結果的には，昨年度の後半の実習とほぼ同様の方法で行うことになった。学生にとって，早く実習環境に慣れることや学習を深める際に必要となる図書が充実していることは重要である。2日間にわたり2名のスタッフと共に行う援助活動はそのスタッフとなじみの関係を形成して

おり、それぞれの職種の役割やフロアの業務の流れを把握できるのみならず、ケアチームに自然に溶け込めたとと思われる。また文献は、少しは施設にそろえておいたが、実習終了後にも図書館の利用が可能だったことは学びを深める上で有効であった。

学生は、老人保健施設での実習において、各々の受け持ち利用者への看護支援をしながら、施設の特徴、各専門職の役割と協働、高齢者と家族の関係性、高齢者の精神心理状態、身体的状態、社会的状況、老人観など幅広く学習できた。受け持ち利用者は1人であるがカンファレンスなどグループ内で情報を共有化する時をもつことによって学びの幅を広げることができた。臨地実習における老人病院での実習ではほとんどなかった施設から在宅への移行は、ほとんどの利用者に予定されていることであった。老人保健施設における実習において、通所リハビリ・ショートステイ・ミドルステイなどの実施、利用者の家族の介護負担、および退所をめぐる利用者および家族の心理状態、退所前の住環境整備の必要性、在宅療養を続けるための人的・物的社会資源の活用などにまで、学生は実践や体験の範囲を広げることができた。さらに、実際にはこの社会資源にも活用の限界があること、あるいは、老人保健施設が中間施設というよりは特別養護老人ホーム待ちとして使われる場合もあること、医療施設と福祉施設における感染予防対策の違いからくる現場の混乱など、社会的な問題として考えを発展させることもできた。

以上のことから、実習前の学習状態、実習環境づくり、実習指導体制は、ほぼ確立したと思われる。しかし、学生からは「もっとスタッフと現実の問題について話しかけたかった」「フロアの業務に流されて自分の目的を見失いそうになった」、スタッフからは「学生の学びを共有化したかった」「業務内容以外のことも聞いてほしかった」という意見があったことは、現場だからこそ学べることへのさらなる指導強化が必要であると思われる。介護保険制度が始まって、利用者を受け入れるシステムが変更になり書類の作成などこれまでの業務とのギャップから現場では時間の流れや人の動きに多少の混乱はある

ものの、利用者のニーズは同じはずである。スタッフがこれまで通りに利用者を支援していこうとすると、この社会保険制度の動きはどのような影響があったのだろうか。また老人保健施設の本来の機能と現実の矛盾にどのような思いをいただいているのか、現場ではどのように継続教育が行われ自己研鑽されているのか、各専門職は十分に機能しているのかなどについて、事前のアンケート調査でも記述されていないため、自発的に問題意識をもてるような工夫が必要であることがわかった。

IX. おわりに

今年度は学ぶ環境が整っていたことから、これまでより一歩進んで「現場だからこそ学べることへの指導の強化」「学生とスタッフの学びの共有化」が課題として出てきた。今後は、講義の中で高齢者を支援する側の問題についてもっと考えられるような機会を作ることも可能であろう。また学生がこれらの課題を意識化できるように、老年看護の教員および施設の関係者とも話し合っ、今後も実践の場で学びながら考えを深められる老年看護を目指していきたい。

謝 辞

今回の実習に快くご協力して下さったS老人保健施設の職員の皆様様に心より感謝申し上げます。

文 献

- 1) 聖路加看護大学紀要, No.26, 2000.
- 2) 岡本祐三: 介護保険の教室, 「自立」と「支え合い」の新秩序, PHP 新書, 2000.
- 3) 吉田充, 田中とも江: 縛らない看護, 医学書院, 1999.
- 4) 2000年度聖路加看護大学学生便覧
- 5) 藤腹明子, 黒田裕子編: ケースレポートをまとめるコツ, わかりやすい臨床実習のハンドブック, 小学館, 109-120, 1998.

Learning and Tasks in Gerontological Nursing Practice at Health Service Facilities for the Elderly

Wakako Kushiro, R.N.¹⁾, Masako Minamikawa, R.N., M.N.¹⁾,
Tomoko Kamei, R.N., Ph.D.¹⁾

Gerontological nursing practice learned at a health service facility for the elderly has reached its second year. Preliminary arrangements were done thoroughly due to the introduction of the Long-term Care Insurance System and the staff shift at the training facility. Moreover training tasks of the previous year, namely pre-training learning state, arrangement of training environment, and the system of training guidance were amply reviewed, reaching to the conclusion of taking the similar training method performed during the second half of the last year. Aside, this time, a case report was assigned for each individual student in order to achieve an integration of academic and practical learning.

Data for qualitative analyses was taken from the contents of "Daily Training Record" and "General Assessment", and case reports of 4 students who trained during the first half. Through analyses of the categorized students' learning notes, 6 categories of "Role and significance of health service facilities", "Role and liaison among professionals", "Actual supporting activities", "Significance of the family", "Life after leaving facilities and social support", and "Reconsiderations of the training" were extracted, as well as subcategories for each. From these results, it was considered that although each student took charge of a single facility-user, training objectives were achieved through the information-sharing of the 4 students.

"Guidance re-enforcement towards practical learning in the actual field", and "Sharing of learning among the staff and students" were raised as tasks for the future from the students' post-training reconsiderations and inquiries to the facility staff. A thorough consideration towards the next year will be undertaken so that students acquire a deeper learning on gerontological nursing.

Key words

nursing practice, gerontological nursing, health service facilities for the elderly, sharing of learning

1) St. Luke's College of Nursing, Gerontological Nursing